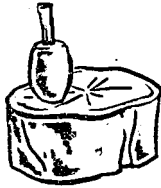


国語表現法をよくしていくこと



はじめに

国語教育一般と、『ローマ字文教育』とを、おだやかに調和させるために、根本において考えておかななくてはならないのは、国語表現法の問題である。

日本語には、日本語なりの、ものの言いかた・述べかたがある。これが、国語の表現法である。わたくしどものすべての言語生活は、これによっている。

この表現法を、どのようにして、よくしていくか。これは、国語生活上の基本問題である。

ことには、その改善の方法について、一つ二つのことを述べてみよう。

根源としてたいせつなのは、合理化の精神であると思う。

なれあいになっている 言いかたは吟味して

習慣的につかっている表現法、たとえば、書きことばの、「あやまりなきを保しがたい」というようなのを、むぞうさには利用しないようにしたいものである。こんなのは、利用しようとする人々を、かえって、まよわせる。ただの魅力を感じて、この種の句法を使うようだと、現代人はもはや、「あやまり

のあるのを保しがたい」などとしかねない。あやまりがあるかもしれないというつもりなのだから、「あやまりのあるのを」という発想になるのは、むしろ自然であろう。自然に、こうして、表現法合理化のきざしが出ている。これをぐんぐんと、おしていけばよい。そうすると、「保しがたい」というような語句は、当然に吟味され、解体されてくる。

評論家が、話しの席で、「何々の不毛性を開拓する」と言ったとする。「開拓する」からひるがえって、「不毛性」の言いかたを受けとるとき、この言いかたは、むずかしすぎるように思えるのである。やはり、「不毛性」ということばが、無反省に愛用されているのではなからうか。言語の慣習はもとよりとうとい。しかし、これに安易によりすぎる思考の生活は、とうとくない。

日常の座談に、「すなわち」などと言ったらどうであろう。その話しぶりは、にわかにかたいものになってしまう。一つの言いかたが、その場のふんいきを左右する。会話の席で、わたくしどもが、ものを言うたびに、一座の空気をあたため、うるおすことができたら、どんなに愉快だろう。これは「例の文句で笑わせてやろう」といったような心がけで、なしとげられるものではないと思う。

耳にまぎれなく聞えてく ることばづかい

漢字ことばの使用が法外になると、その言いかたは、耳に聞えにくいものになる。漢字の音には特殊の効果があるが、その美感・特長だけに引かれると、そこからは、表現法のすっきりとしない言いかたが、出てきやすい。

その、かなりわかりやすいように——つまり、耳に聞き入れやすいように——思われるもの場合でも、漢語の使用法を吟味してみると、おかしいと思われるようなことがある。たとえば、弟子たちが先生をたたえて、文章に、「学恩深い先生」と書く。「学恩」は、弟子たちがその先生から受けたものである。それが「深い」のである。ところで、「学恩深い→先生」と言う。表現法のかたちから言えば、「学恩深い」は「先生」を修飾している。これは、すっきりとしない言いかたではないか。わかりはするが、それは判断してのことであって、このことばづかいそのものは、むりなつなぎかたになっていると思う。いつかの新聞記事に、「御差遣宮殿下」というようなのがあった。

話す時にも、「研究に過分のご協力をいただきまして」などと言う。なるほど、いちおうは耳に聞える。言おうとすることがわかる。が、ひとたび思いかえすと、「え?」となる。「過分の」は、「わたくしどもにとって」であろう。それが「ご協力」につくと、表現法のかたちから言えば、あなたの「ご協力」が「過分」ということにもなる。「過分の→ご協力」は不鮮明な言いかたである。

前の例もそうであったが、すべて、こちらのこととそちらのことをいっしょに言いと

むと、こんらんした表現法になる。この点、どうしても、ことばをえらび、ことばのくみあわせをよく考えて、言いかたのすじを、はっきりとさせなければならぬ。つまり、表現法を合理化しなければならない。こうしてはじめて、そのことばづかいは、耳に、まぎれなく聞こえるものになる。

漢字ことばを正しく利用すること、漢語を運用することはたいせつである。しかし、心ない漢語使用は、意外に多く、表現法のこんらんをまねく。

へいその口ことば・話しことばとしては、つとめてひらいた言いかたをしたのがよいことは、言うまでもなからう。そこによく見られるのが、漢語の言いかたである。たとえば、「写真撮影をする」をあらためて、「写真うつしをする」と言う。これは、なるほど、前のよりは、人々の耳に聞えやすいものになった。が、言いかたのぎごちなさはどうであろう。いっそのこと、「写真をうつす」と言えばよい。これなら、人々の耳にすっとはいる。その、自然のつたわりかたが、たいせつである。

まぎれなく聞えてくることばづかいは、真そこからすっきりとした表現法のことである。それは、やまとことば本来の表現法の線にそつたものということにもなる。

「きのう、そのことについて、会議を持った。」とか、「近く研究会を持ちたい。」とかの言いかたは、今のところ、まだ、こなれた表現法とは言えまい。つまり、真そこからすっきりとは、聞えてこないように思う。新しい表現法の開拓も、国語表現法の基本的ないきかた、国語表現法の一般的な流れに、うまく（過不足なく）乗るのでなくてはならない。乗ったものは、まぎれなく、ごく自然に、わたくしどもの耳にひびく。

和語さえつかえば耳にわかりやすいという
 ようなものではない。ことば・ことばづかい
 には、それぞれに、時代的なあじ・色あいと
 いうものがある。あまりに古めかしいことば
 を使うと、それは、現代に生きている人々に
 は、かえってことごとしく聞え、異様に聞え
 る。——すなおにひびくところではないので
 ある。書くときなら、かなり古語めいても、
 まずよかろう。話すときには、思いきって、
 現代口調をねらったのがよいと思う。さて、
 生きのよい、雅醇な現代口調が、なかなか探
 究しにくい。

わかりやすい和語の言いかたで、たとえば
 「なくなる」というようなことばづかひも、
 厳密な文章表現を要する論文の場合などとな
 ると、なかなかつかひにくいものであること
 を、わたくしは、つい近ごろ知った。いいか
 げんなつかひかたでは、このひとことばも、
 人には、なかなか、こちらの思いどおりに
 は、聞き入れてもらえないのである。つぎの
 ようなことがあった。わたくしの文章を、英
 文にほんやくしてもらったのである。原文
 に、「……なくなる。」とあった。すると、
 訳者は、「なくなると言うが、それは、to be
 used up なのか、to be lost なのか、to be
 missing なのか、to disappear なのか。」と
 言うのである。これにはすっかりこまった。
 わたくしの「なくなる」は、なんとも、聞え
 のわるいことばづかいだったのである。

あい手に、まぎれなく聞える、あい手の耳
 に、すっとおるといことが、あい手の、心
 の耳にまでおることではなならないと
 すると、わたくしどもは、表現法をよくして
 いくことを、どこまで深く考えても、考えす
 ごしはない。

いちおう耳に聞えやすいことばづかひも、
 なお、分析に分析をかさねて、厳格な、すじ

め正しい表現法にしていかななくてはならない
 と思う。

ひとことばも

ひとことばも、わきまえてつかう、というこ
 とが、表現法をただす骨子なのではないか。

「的」というやっかいな字がある。「国文学
 の哲学的研究」と言う。また言う、「方言語
 彙学的研究」。「の」という語の場合にも、い
 ろいろの用いかたが見られる。「子どもの
 日」、「宮沢賢治の手帳研究」。

このように、ごく近いところにも、わた
 くしどもが、「ひとことばを！」思わなくて
 はならない事例が、よこたわっている。

国語に生きるすべての人が、たがいに、表
 現のすなおさを求めあうようになれば、おの
 ずから、国語の個々の表現法は、よい方向に
 統一されていき、かつはさらに、それが、發
 展せしめられるであらう。

(Huziwara-Yoiti: 広島大学助教授・文学博士)